

## 本文

Q-1. (3) ¡Hola!, Tomoko, ...ですが, ¡Hola Tomoko!, ...ではまずいですか？

A-1. この場合の Tomoko のように呼びかけの語はコンマで区切るのが原則です。¡Hola, Tomoko!は可。

Q-2. (3)本文において、Juan が Tomoko に電話をかけ、Juan から話し始めています。日本なら、「もしもし Tomoko です。どちらさまですか？」「もしもし、Juan です」というように、電話をかけられた方から話し始めますが、スペインではかけた方から話し始めるのでしょうか？

A-2. たしかに、ふつう、受話器をとる人が最初に Diga. (地域によって、Aló, Bueno, など)とか ¿Sí? などと言います。8 課の本文では、それを省略して、いきなり Juan が話し始めている感じですが、Tomoko: ¿Sí? を補ってください。その後で、Juan が ¡Hola!, ...と挨拶します。ご指摘をどうもありがとうございました。

Q-3. (8) terminar の後の de は何の意味があるのですか？

A-3. terminar は他動詞でたとえば Terminaré este trabajo dentro de poco. 「私はこの仕事をもうすぐ終えるつもりだ」のように使えますが、不定詞が続くときは terminar de + 不定詞で「...をすることを終える」という意味になります。

Q-4. (9) Habré terminado de estudiar a las ocho de la tarde となっているが、なぜ完了形と時刻を同時に使えるのか疑問に思った。英語では完了形の文章に明確な時刻を表す言葉は使ってはいけないので。

A-4. 英語で明確な時刻を表す言葉が使えないのは現在完了です。未来完了ならば、He will have been abroad three years next October. 「次の 10 月で彼は外国に 3 年いたことになる」のように言えます。スペイン語でも同じです。なお、スペイン語の現在完了形は、過去を表す副詞とともに使うことができます。

Q-5. (10) comenzar と empezar はどんな違いがあるのですか？

A-5. ほとんど同じ意味ですが、empezar のほうが幾分頻度が高く、comenzar は少し堅い表現として使われます。また、どちらも「～を始める」という他動詞でも使われます。

Q-6. (11) vale と de acuerdo とはどう使い分けをすれば良いですか？ 又、vale はどういう形なのですか？ (不定詞がどうなったものなのですか？)

A-6. Vale は valer 「価値がある」という動詞の 3 人称単数で、「それでよろしい」という意味です。しかし、vale は valer という動詞の意味から離れて、それだけで間投詞のように使われます。これはスペインの用法で、ラテンアメリカでは O.K. がよく使われます。De acuerdo はスペインでもラテンアメリカでも使われます。

Q-7. (13) las ocho y cinco は ocho は 8 時のことなので horas が省略されていると思うが、cinco は 5 分のことなので、minutos が省略されている。そこで冠詞が las なのは時間に合わせているからなのか。los になることはないのか。

A-7. las は「時間」の hora に合わせています。las が直接かかるのは「時」までで、y でいったん区切れたあとの「分」にはかかっていません。文 14 の las ocho y veinte も同じ。

Q-8. (16) un poco は副詞、poco は形容詞ですか？

A-8. un poco は(16)のように副詞になりますが、ほかに不定代名詞としても使われます。たとえば un poco de sal 「少量の塩」。これは肯定的な意味です。一方、poco は形容詞にも副詞にもなり、「少ししか...ない」という否定的な意味で使われます。

Q-9. (18)疑問文のイントネーションについて。CD-ROM の録音によると、語尾が下がっています。疑問文の語尾を上げるか下げるかによってどのようなニュアンスの違いが表現されるでしょうか。

A-9. 語尾を下げる疑問文の意味は「お芝居の時間に間に合いますか？」

という新たな情報を求める質問ではなく、「お芝居の時間に間に合うんでしょう？」という確認の意味になるようです。この文脈では「大丈夫？」という感じだと思います。

Q-10. (21) Por cierto は「ところで」と「もちろん」と言う意味がありますが、何故同じ Por cierto で二つの違った意味を持つのですか？ cierto は英語の certain に当たるので、「もちろん」の方は分かる気がしますが、特に何故「ところで」の意味を持つのか分かりません。

A-10. 「ところで」の意味は、「そう言えば、確かに...」から「ところで...」という意味に変わったのだと思います。

Q-11. (22) ir a は英語の go to と同じですね。

A-11. というよりも、英語の be going to に近いです。

Q-12. (23) mejor が最上級になるのは、その前に las があるからですか？

A-12. その通りです。

## 文法

### 1. 不定詞と分詞

Q-1. estaba+現在分詞と estuve + 現在分詞の違いは？

A-1. 基本的に線過去と点過去の違いと同じです。つまり、estaba+現在分詞は過去にあったことが、終わってしまったものとは意識していないとき、とくに他の出来事が起きたことの背景になるときに使います。たとえば Yo estaba comiendo 「私は食事をしていた」ときに、sonó el teléfono 「電話が鳴った」というような別の出来事があった場合に使います。とりたてて出来事がなくても線過去の進行形にはそのような出来事の背景であることが感じ取れます。一方、点過去の進行形は過去のある時点で済んでしまった進行状態を示します。よく時間の副詞句で限定されていることがあります。たとえば、Yo estuve trabajando durante cinco horas. 「私は5時間働いていた」。

Q-2. SER 受動態は英語と同じでわかりやすい。

A-2. そうです。ただし、過去分詞が主語の性数に一致して変化しますから注意しましょう。

Q-3. ser 受動態の過去分詞はなぜ性数変化をおこすのでしょうか？

A-3. たしかに、英語の be 受動態で使われる過去分詞とは違って、スペイン語の ser 受動態の過去分詞は主語の性数と一致します。これは、たとえば La ciudad fue destruida. 「その都市は破壊された」という文が、Mi casa es pequeña. 「私の家は小さい」という文と同じように、「主語 + ser + 主語の補語」という構造になるためです。この補語は形容詞でも過去分詞でもかまいません。＜主語の＞補語なので主語と性数が一致するのです。このように、ser 動詞は主語と補語を結びつける役目を果たしますが、それがいない場合は「名詞 + 形容詞・過去分詞」の構造になり、ここでも次のように形容詞と過去分詞は名詞に性数が一致します。la ciudad destruida 「破壊された都市」、la casa pequeña 「小さな家」。「主語 + ser + 主語の補語」の構造と「名詞 + 形容詞・過去分詞」の構造で偶然同じ現象（性数の一致）が起こったのではなく、2つに共通する文法の仕組み、つまり構造（語句の繋がり）の明示化があると考えられます。そこで複雑な文を読むとき、性数の一致を手がかりにすると構造がわかりやすくなります。

Q-4. 現在分詞の用法については教科書 p.66 に3つ例が紹介されていますが、現在分詞はこの3つの例と進行形以外の使い方はないのでしょうか？英語のいわゆる ing 形に比べると随分少ない気がします。

A-4. 教科書では用法を絞って提示しましたが、現在分詞の用法は、以下のようにスペイン語でも多岐に渡っています。

・Partiendo temprano (= Como partimos temprano), cogimos el tren de las ocho. (早く出発したので、私たちは8時の列車に乗れた。「原因」)

・Partiendo temprano (= Si partimos temprano), cogeremos el tren de las ocho. (早く出発すれば、私たちは8時の列車に乗れるだろう。「条件」)

・Aun partiendo temprano (= Aunque partimos temprano), no cogimos el tren de las ocho. (早く出発したけれど、私たちは8時の列車に乗れなかった。「譲歩」)

・Mi padre, siendo niño (= cuando era niño), vivía en el Perú. (父は子供のころ、ペルーに住んでいた。「時」)

・Las chicas vienen cantando. (女の子たちは歌いながら来る。「様態」)

なお、英語では living dictionary のように、現在分詞が形容詞として働いて名詞を直接修飾することができますが、スペイン語にはこのような用法はありません（例外は el agua hirviendo (沸騰した湯) など特殊なものです)。

Q-5. 教科書 p.66 に掲載されている現在分詞を用いた文

Dejé a mis hijos jugando a su gusto.

の現在分詞「jugando」の部分は、不定詞「jugar」であっても意味は変わらないように思いますが、どうなのでしょう？ニュアンスの違いとかありますか？よろしくお願いします。

A-5. dejar のうしろには不定詞も現在分詞も持つことができ、意味に大きな違いはありません。ただ、現在分詞を使えば「進行」のニュアンスが表現されますので、文脈に応じてどちらを使うのがより適当か考えるべきでしょう。

Q-6. スペイン語では英語で言う原型をそのまま不定詞としてもちいていますが英語の to にあたるような助詞がないのはなぜですか？

A-6. とても答えにくい質問です。かなり原理的なところにさかのぼらせてください。

そもそも「原型」とは何でしょうか。スペイン語や英語のような屈折語はもちろん、日本語のような降着語でも、動詞は活用します。主語の人称・数や時制により、あるいは体言の前に

つくか用言の前につくか等によって動詞はいろいろな形をとります。いろいろな形になるのが動詞だとすれば、動詞にはそもそも最初から定まった「原型」というものはないんです。

それでは「原型」とは何でしょうか。そのように千変万化する動詞であっても、辞書に載せなくてはなりません。辞書に載せるためには、その動詞の「名前」を決めなくてはならない。というわけで、「原型」とは、辞書に載せるために動詞の「名前」として選ばれた活用形なんです。日本語では辞書には動詞の終止形を載せることに決まっていますが、大野晋という国語学者は、いやむしろ連用形を載せるべきだ、と主張しました。動詞「問う」を「問い(ます)」と連用形で載せると、名詞の「問い」と同じ項目で説明ができてとても具合がいい、というわけです。

これと同じように英語の「原型」も約束事です。つまりそれは要するに、英語では動詞の一人称単数現在形を辞書に載せることになっている(ラテン語もそうです)、というだけのことなんです。

ところがスペイン語では諸般の事情で、一人称現在単数形がひじょうに不規則で、とても動詞を代表するものとして辞書には載せられない。ところがスペイン語には to なんかを付けなくても動詞を名詞扱いにできる形(-ar、-er、-ir)がある。それならそれをその動詞の名前にして辞書に載せよう、と決まったわけです。

言葉というのは約束事に始まり約束事に終わります。そのことをいやでも悟らせられるところが第二外国語を学ぶおもしろさだと私は思います。

## 2. 比較

Q-7. 「7は5より2大きい」という文章をスペイン語に訳すとどうなるのでしょうか？

. Siete son dos más de cinco.

. Siete son dos más que cinco.

のどちらが好ましいのでしょうか？ que と de の使い分けのルールからすると「数」なので前者のような気が私はするのですが、確信が持てないので質問さしあげた次第です。あるいは、grande の比較級を使う場合、

. Siete son dos más grande de (que) cinco.

. Siete son dos mayor de (que) cinco.

はどちらがよりナチュラルなのでしょうか？私は mayor だと主観的な大小をさすはずなので、数字という客観的な大小比較には前者と思うのですが、スペイン語にある程度通じてると思われる人が mayor を使っていたので少々混乱しています。最後ですが、ser 動詞は son ではなく単数形の es は使えないのでしょうか？ El número 7 es más grande del número 5.ともいえそうですが、足し算では 5 más 2 son 7 と son を使うようなので、混乱してます。

A-7. この文にはとても複雑な問題が含まれていると思います。結論は、Siete es más mayor que cinco con una diferencia de dos.がよいようです。(スペイン人から教えてもらいました。)まず、cinco の前が que であることは、数量の場合は de、という原則とは違います。実は、más de cinco という言い方は、「5という基準より多い」ということなので、このように純粋に両者(7と5)を比較するときは、ふつうの比較構文のように que を使います。más mayor というのも冗長に見えますが、ここではこれが自然です。そして「差」を示す表現は、ふつうは Juan es cinco centímetros más alto que yo.のように比較の直前に置きますが、この場合は Siete es dos...という連続を避けるために、上のような手段をとっています。

## 3. 再帰動詞の基本用法

Q-8. 「直接再帰用法」と「間接再帰用法」の違いを教えてください。(文法用語は未だに苦手です。)

A-8. 「直接再帰用法」は再帰代名詞が文の中で直接目的語の役割を果たしているときです。たとえば Me lavo 「私は自分の体を洗う」の Me は lavar の直接目的語です。一方、「間接再帰用法」はそれが間接目的語になっています。たとえば Me lavo la cara では la cara が直接目的語で Me は間接目的語です。この文は直訳すると、「私に顔を洗う」となりますが、ふつうは「私は顔を洗います」と訳します。

Q-9. 再帰動詞の所なのですが、「相互用法」は「相互」と言う位で、意味的にも複数形のみですか？

A-9. その通りです。「互いに」ということなので主語はかならず複数になります。

Q-10. 3人称の再帰代名詞は、なぜ le や lo などではなく se なのですか？

A-10. まず、Pedro levanta a Juan. (ペドロはフアンを起こす)という例文を見てください。この例文の a Juan を代名詞に直すと、Pedro lo levanta. (ペドロは彼を起こす)となります。ご質問のように、再帰代名詞(「自分自身を」)にまで lo (や le) を使うと、この文の意味があいまいになってしまいませんか(lo は主語のペドロなのか？ それともフアンなのか？)。そこで3人称では、「主語自身を・に」を表す新たな再帰代名詞(se)を導入し、意味を明確にする必要があるのです。1人称・2人称で新たな再帰代名詞を考案する必要がないのは、「私を」とか「君たちに」とか言えば、それだけで特定の人が定まってしまう、あいまい性が生じないからです。会話の中でいきなり「彼」と言われても誰のことか分からないけれど、「君」だったら分かりますよね。

Q-11. 先日再帰動詞の用法を学習しましたが、スペイン語にはなぜ自動詞が少ないのか気になりました。わざわざ他動詞を特殊な用法によって自動詞化することには、なにか文化的な要因があったのでしょうか。ほかの活用のように、語尾活用で表現することも可能だったと思うのですが・・・。

A-11. 言語についてのすばらしい観察です。私も自動詞が少ないな、と思っていたのですが、42,000語の辞書をパソコンで検索して調べてみました。結果はあなたのおっしゃる通りでした。自動詞が他動詞に比べて半分にも満たないのです(自動詞が約1,700語、他動詞が約4,600語)。この少ない自動詞の意味の分野をカバーするのが再帰動詞です。

この理由を「文化的な要因」に求めるのははとも興味があります。文化は歴史的な遺産を引き継いでいるので、少し言語の歴史を辿ってみましょう。スペイン語の母親であったラテン語では、現代スペイン語の再帰動詞にあたるものとして、いろいろな形態がありました。その中でもとくに受身形が重要だと思います。現代スペイン語の再帰動詞にも受動態の用法がありますね(教科書 p.77)。なぜ主語と同じものを指す代名詞(再帰代名詞)が受動態を作るのでしょうか。これが再帰動詞のポイントです。それは、たとえば「私が起こされる」(受動態)でも、「私が起きる」(自動詞化)でも、どちらも「起きる」人は「私」だからです。そして、「彼が私を起こす」と言って他動詞が使われたときも、その結果「起きる」人も、やはり「私」であることに変わりはありません。それらに共通した意味を再帰代名詞が担っているわけです。

教科書の本文におもしろい文があります。p.74の文14と文15です。14でエルピラは Te pones nervioso muy fácilmente. と言うと、15で Pedro は Tú eres la que me pone nervioso. と言い返しています。14の Te pones は再帰動詞ですが、15の me pone は他動詞です。どちらにしても「イライラしている」のは Pedro ですね。このようにスペイン語では他動詞と自動詞

が密接に結びついているので、両者を関係づけて考えるとよいと思います。

たしかに、おっしゃる通り、自動詞化の用法をほかの活用のように語尾活用で表現することも可能だったのです。まさにラテン語では現代スペイン語の再帰用法にあたる自動詞の意味を活用語尾で表現していました。たとえば、laetor, queror と言うと、me alegre や me quejo の意味になりました。しかし、ラテン語の動詞活用はかなり複雑なので、それがスペイン語の歴史の中で、順次整理されて、現代スペイン語の形に落ち着きました。なお、参考までに、ラテン語やゲルマン語の祖語として想定される印欧語では、主語が「行為を引き起こす」という型になるのに対し、日本語などは主語が「ある状態に自然になる」という表現をする傾向があった（現在もある）、という見解が歴史言語学や言語類型論で論じられています。

**Q-12.** 再帰動詞の勉強をされていて気になったところがあるので質問させていただきます。

¿Te has lavado la cara? とありますがその下の方に「英語では Have you washed your face? となる」と書いてありました。なぜスペイン語では your にあたる tu を使わずに cara を指す冠詞が la となるのでしょうか？

**A-12.** 言語を比較すると、いろいろと発想の違いが見つかっておもしろいですね。ご質問の問題も、とても興味あるテーマです。たとえば、「洗顔する」というとき英語のように Lavo mi cara (=英語：I wash my face.) のような言い方よりも、スペイン語では Me lavo la cara. という方が普通です。これは、「洗顔する」(lavar la cara) という行為が私に(me)およぶ、という発想です。もし、Lavo mi cara という、mi cara という物体に向かって直接 lavar という行為が及んでいる感じです。たとえば、¿Por qué si lavo mi cara varias veces al día, aún tengo acné? 「一日に何度も顔を洗っているのに、なぜニキビが出るんだろう」という文を見るとその感じがわかると思います。ここでは単に「洗顔する」というよりも、具体的に mi cara をしっかりと意識してそれをごしごし洗っている感じがします。なお、このような言い方は再帰動詞に限らず、相手の体や持ち物に行為が及ぶときにも一般に所有形容詞よりも間接目的語を使います。たとえば、¿Te lavo la cara? 「顔を洗ってあげましょうか？」スペイン語では間接目的語の代名詞、英語では代名詞の所有格、そして日本語ではどちらも示さないのが普通です。たしかに、比べてみるとおもしろいと思います。

## 練習

**Q-1.** 練習 1 (1) の has estado esperando の構造がわかりません。

**A-1.** haber + estar の過去分詞で現在完了形ができ、estar + 現在分詞で進行形ができます。この組み合わせで現在完了進行形となり、ある動作が現在の時点までに続けられたことを示し、「...してきた」、「...し続けた」という意味になります。

**Q-2.** 練習 3 (1) なのですが、ホームページの解答は más grande となっています。p.67 を見ると grande の比較級は mayor ですが、どちらでもいいのでしょうか？

**A-2.** ここは大事なところなので、授業でもきっと説明があったと思うのですが、más grande は物理的な大きさを比較するとき、mayor は抽象的な大きさ、もしくは年齢を比較するときに使います。P.70 の 3 (1) は maleta (スーツケース) の大きさ (つまりは物理的な大きさ) を比較しているので、más grande の方を使います。